

アスファルト舗装における敷均し温度の確保

宮崎県土木施工管理技士会
湯川建設株式会社 土木部

佐藤 公彦

1. 適用工種

上層路盤厚15cm、表層厚5cm、幅員5mの道路
新設工事の一般的なアスファルト舗装である。

2. 問題点

アスファルト舗装において、混合物の運搬にお
ける温度低下のより、十分な締固めが困難な場合があ
る。

その対策として、出荷温度を通常より高めたり、
運搬車（ダンプトラック）の混合物の上に帆布を重
ねたり、保温用シートを用いたりすることにより、
現場への到着温度をある一定の温度に保ち舗設する
ことで、一定の締固めを得る。

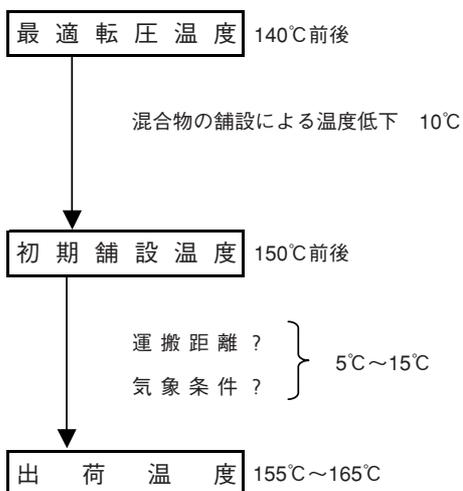


図-1 プラントにおける混合温度の決定

ここで問題になるのが、運搬車（ダンプトラック）
が10台以上になると、それぞれに指示が出せるかど
うかである。

ある施工現場で、通常のアスファルト舗装を施工
したが、部分的に締固めが不十分なところが発生し
た。混合物の温度管理、初期転圧、転圧回数等なん
ら他の部分と変わらず通常であったので、いろいろ
調べた結果、運搬車（ダンプトラック）の混合物の
保温の施工及び保温資材により、若干の温度変化が
あったようだ。

3. 工夫・改善点

次の現場で、通常のアスファルト舗装を施工する
にあたり、極力運搬車（ダンプトラック）の保温材
を帆布2枚・保温シート1枚（写真-1）に指示し
たところ気象条件もおおよそ同じであったにもか
かわらず全般にわたってアスファルトの締固め度は確
保できたようだ。



写真-1 保温シート1枚、帆布2枚

4. 効果

帆布・保温シートの使用条件については運搬距離・気象条件によってその都度替わっていきだろうが、帆布2枚・保温シート1枚使用した現場では、初期舗設温度が概ね150℃であったことから考慮した枚数である。

5. 適用条件

一概に混合物の運搬距離だけで、保温資材枚数の関係は説明できない。まして気象条件との関係ほど難しいものはない。

但し、1つの現場でアスファルト舗装の施工性を考え、保温資材は同一条件とするのが望ましい。

6. 採用時の留意点

混合物の保温資材にも長所・短所があるようだ。

帆布の場合、通気性に富み軽量であるため利便性があるが、保温の効果はシートに比べると半減する。

保温シートの場合、密封に近いため保温効果は、優れているが通気性に欠けるため、混合物の含水量が増えて混合物の締固めがやや落ちてくるようだ。

最後に、敷均し温度は、1つの現場において一定に保つことが必要であり、それがアスファルト舗装の施工性に十分な影響を与えることが分かった。